

毎月11日は「人権を確かめあう日」です。

2020/11/11 人権教育部

○県内の高校生が書いた作文をもとに、身近な人権についての考えを深め合う機会にしましょう。筆者は祖母との関わりをもとに、盲導犬について知ってほしいことや、さまざまな人々による支援への思いを綴っています。私たちも「助け合い」ということについての思いを深めましょう。

思いやりの心

私の祖母は視覚障害者だ。視覚障害はいくつかのクラスに分けられているが、私の祖母は其中で一番重い1級の視覚障害者だ。1級というのは、俗に言う「全盲」ということで、私の祖母は、光を感知できるかできないかのぎりぎりらしい。

さて、私の家には盲導犬がいる。盲導犬は、視覚障害者1級しかもらえないらしい。もちろん1級の人でも「白杖」という杖を使って歩いている人もいる。

よく聞かれることがあるのだが、前提として、盲導犬はナビではない。「盲導犬がいるのに、視覚障害者が人が迷うのは何で？」と聞かれたことがある。それは、盲導犬は犬なのだ。盲導犬は連れて行く犬ではなく、指示通りに動き、飼い主を安全に導いていくのだ。なので、もちろん道に迷うことだってある。

私の家では、よく早朝に母のスマホが鳴る。祖母が道に迷ったとき、母に電話をかけるのだ。そうなれば、私の母と私は、祖母を探しに行く。

視覚障害者は、一度迷うと自分がどこにいるのかわからなくなってしまう。それに、交通量の多いときには事故に遭う確率も高くなってくる。そんな時、祖母を知っている人や、時には知らない人でさえ、祖母が把握できるところまで連れていってくれるのだ。

最近では、多くの小・中学校で「福祉体験」が行われており、小さな子が、祖母が困っているときに声かけをしてくれるらしい。そんな多くの存在に、祖母はいつも感謝してもしきれないと言っている。

これは、祖母が視覚障害者であるから特別に聞こえるが、普段、私たちが過ごす日常生活の中でも、よくある話だと思う。例えば、地元から離れ、遊びに出たとき、自分と面識のない人に道をたずねることがあるはずだ。またその逆で、たずねられることだってあるはずだ。

人は皆、助け合いながら生きている。普段意識することは少ないであろうが、私は祖母のおかげで、それに気づくことができた。人に助けてもらえることは当たり前ではなく、むしろ、普段から感謝することだと改めて祖母を通じて私は感じた。

・「感謝すること」の大切さを祖母から感じる事ができたことは、普段から周りの状況を観て、優しさを持って行動しているからである。そんな彼女だからこそ気づけた感性であると思う。この人権作文を通じて、どのような状況や環境であろうとも相手に「感謝する」気持ちや態度を持ち続けていくものである考えを広げていくことができる。